

日本が親日台湾を失ってはいけない理由

日本人に知って欲しい台湾

前交流協会高雄事務所長

神戸

浩道



講演で熱弁をふるう神戸氏

本稿は、去る七月十日に行われた当会主催の第四回台湾セミナーにおける神戸浩道氏の講演要録である。講演は多彩な内容だったが、紙幅の関係で掲載内容が限られたのは残念である。

(本誌編集部)

台北時代

私は、今年の三月まで財団法人交流協会高雄事務所の所長を務めていました。もともといた外務省も、今年の三月三十一日には定年退職いたしました。四十余年にわたる外務省勤務で二十七年間ほど海外勤務をいたしました。そのうち台湾には二回の勤務で通算六年三ヶ月を過ごしました。

一回目の台湾勤務は一九九五年から三年間で、私は領事部長を務めていました。台北時代の大きな思い出といえば、第七代台湾総督の明石元二郎総督のお墓を発掘したことです。

私は、その発掘の現場責任者となったのです。

明石総督のお墓は、林森北路と南京路の交差点に面したスラム街の中に取り壊してありました。台北市から、ここを取り壊して公園にするから、総督のお墓の対応を日本側で考えてくれと要請があり、私は下見にと、恐る恐るスラム街に行きました。そこで目にしたのは、なんと畏れ多くも総督のお墓の上に公衆便所が作られていたのです。このスラム街は戦前は日本人墓地で、戦後、大陸から来た国民党軍の兵士たちが勝手にバラックを建てて住んだところです。家の土台や壁には、日本人の墓石がさまざまに使われていました。これは何とかしなくてはと、私は思ったものです。

それからが大変でした。お墓を移設しようにも先立つものがないのです。台北市も日本側も、簡単にいえば、お墓のために公的な予算は使えないというのです。やがて、台北日本

人會に工面していただいたお金と、交流協会本部も奔走してくれたお金とで当面の撤去費用はなんとかになりました。ところがご遺骨の移転先のお墓となると、共同墓地では千万円単位もかかり、とても手が届きません。

そうこうしているうちに、お墓の発掘です。夏の日差しが強い日、土砂をパワーシャベルで取り除くと、まず出てきたのはコンクリート製の箱でした。コンクリート製の枕木のよくな蓋をはずすと、中に木炭に包まれるようにして、檜作りの大きなお棺が納められていました。通常の四、五倍くらいもあるお棺です。発掘後、お棺は台北賓館に安置し、お孫さんの明石元紹氏が来訪されてから開封しました。開封したお棺の中にはまたもや木炭がびっしり詰められていて、骨太のご遺骨が出てまいりました。副葬品といえれば立派なサーベルと長靴の拍車だけでした。その後、ご遺骨は元紹さん立会いの下で茶毘に付してお骨箱に納め、やがてお墓の出来るまであるお寺の納骨堂に預かってもらうことになりました。

その後すぐ私は帰国することになり、後ろ髪をひかれる思いで台湾を後にしました。そして東京勤務の後、オーストラリアの日本大使館に赴任しました。ある日、元紹さんから手紙をいただき、明石総督のお墓が台湾の方のお骨折りもあって、無事台北北部の墓地に納められたことを知りました。そして、のちには、お墓参りにも行くことができました。

台北時代には、ほかにいろいろありました。戦前の軍人貯金などの返還倍率を不満とする台湾のご老人たちに台北事務所が襲撃されたこと。また、尖閣諸島問題、慰安婦問題等でも事務所の外壁に卵を投げつけられたり、デモに遭ったりと、いい思いばかりとはいえません。

しかし、勤めた三年の間に、自分で運転して台湾のほぼ全部を見て歩いたり、日本語で話しかけてくる台湾の人々とふれあったりした生活は楽しく、快適なものでした。

約三年半のキャンベラ生活を経て東京に戻り、最後の赴任地はどこになるだろうと思っていたとき、上司から「神戸さん、高雄もあるけどどうですか？」と言われ、耳を疑いました。もう二度と勤務はないと思っていた台湾です。即座に私は「行きます！ 行きます！」と言ったものです。

高雄時代

高雄には二〇〇六年十二月初旬に着任しました。台北時代に何回か行った田舎町ふうの高雄が、高層ビルが並ぶ都会になつていたのには驚きました。しかし、人情の厚いのは相も変わらずでした。ただ、十年の間に交流協会の影は薄くなつたようでした。国交のない日台を結ぶ唯一の準公的機関たる組織なのに、例の査証免除で行く必要がなくなり、台湾の人々の印象が薄くなったのでは、と考えました。しかしこれ

では、日台の地理的、歴史的にも深い関係が次第に薄くなつてしまふのではないかと思えました。

そこで何かできないかと、国交断絶後中断していた「天皇誕生日祝賀レセプション」の開催を思いつきました。台北事務所はレセプションをすでに復活させていました。東京本部の了承も得て、二〇〇七年、無事三十四年ぶりに開くことができました。このレセプションは高雄でもすでに三回を経ています。毎回、台湾南部の政財界、教育、文化関係の方々等が三百名以上お越しになり、盛大に催されております。

印象に残っているのは、第一回目が無事終わった次の日のことです。知り合いの八十歳代の台湾の方から電話が入りました。その方は「所長、昨日のレセプションは本当によかったです。やっと日本が南部にも戻ってきたという気がする。しかし、あの音楽はなんだ！」と言われるのです。会場のBGMに日本の曲を流しなさいと指示していたのですが、「あの中に『荒城の月』が入っていた。畏れ多くも畏くも、天皇陛下のお誕生日を祝賀する儀式に没落を意味するような曲はけしからん！」と言われる。私はビックリ仰天、台湾では、もう日本では失われているような気持がまだ残っているのです。第二回目からは、もちろんこの曲を外すよう指示しました。

また文化関係にも私は力を入れてきました。台湾各地ではいまも華道、茶道、邦楽、日本舞踊、剣道などの団体がさか

んに活動しています。交流協会高雄事務所は、高雄市剣道協会との共催で毎年「武徳祭」と銘打って、日本文化紹介の会を催してきました。この会では、「羽衣会」という日本舞踊の会の方が踊ってくださいましたが、衣装、かつら、化粧がもうプロ並なのに驚きました。聞けば、衣装やかつらは日本から取り寄せ、着付けや化粧は日本からプロを招いてやってもらうのだとか。これほど日本に傾倒しているところは、台湾以外にないといっても過言ではないでしょう。

また、もう一つ私が入れたのは叙勲です。主に在外公館が推薦して行われる外国人叙勲を、台湾南部でも行えないものかと考えたのです。日本との交流増進や日本文化の紹介や促進に努めておられる台湾の方々の功績に報いるため、叙勲制度を活用するということです。台北では日本語俳句で知られる黄靈芝さんが戦後第一番でした。そこで私は、国交断絶前から日本のために尽くしてくれた人として、昨年は例の鳥山頭ダムを管理する嘉南農田水利会会長で、毎年、八田與一ご夫妻の慰霊祭を行う徐金錫会会長を推薦し、叙勲されました。また今年は、屏東県三地門の原住民で、日本との交流を推進してきた陳俄安さんが叙勲されました。

とにかく私が願っておりますことは、日本と台湾の関係はこれからも不滅であらねばならぬということです。このような特別な親日地域(国)を、日本は失ってははいけません。